

コミュニケーション能力の基礎を養うために

英語 第3学年

珠洲市立緑丘中学校・教諭

1 事例の概要

本校は、平成14年度から3カ年にわたって『学力向上フロンティアスクール』の研究指定を受け、一昨年度研究発表会を終えた。その間、英語科ではコミュニケーションへの積極的な態度を養うことを目指し、ペア活動やグループ活動を主体とした授業の在り方を模索し試行してきた。昨年度の3年生は、自分にとっては初めて授業を担当することになった学年であった。全体的に明るく落ち着いて授業に臨み、グループ活動にも意欲的に参加する光景がよく見られた。そのような生徒の変容から、『生徒どうしの学びあい』を視点を置いた本校の研究の成果を感じることができた。しかしながら、昨年5月に実施された基礎学力調査では、私たちの今までの取り組みが生徒の学力の向上につながっていなかったという結果が示された。「活動」の場面を中心に据えた授業実践をしてきたところ、生徒は楽しそうに活動していて、いかにも授業が活性化されたかのように教師が感じてしまったところに原因があったと思う。

そこで、基礎学力調査の結果を分析し、生徒の弱点を正確に把握し、課題を明らかにした上で、今後の学習指導に活用したいと考えた。とりわけ「書くこと」の領域においては、基本文型の語順の理解が十分とはいえなかった。さらに、「与えられた情報を基に、伝えたい内容を正しく書くことができる」ということをねらいとする問いには、英語を書くことに対する苦手意識が窺われたため、英文を書こうとする関心・意欲を引き出す工夫が必要であると思われた。また、まとまった量の英文の中から必要な情報を聞き取る力も十分に育っているとはいえなかった。

以上のことから、「基本文型の確かな定着とそれを活用する力の育成」と「聞く力の育成」を重点的に指導することを考えた。

2 実践内容

(1) 「書くこと」による自己表現活動

各単元のセクションごとに別紙資料①(C-2)のような基本文プリントを作成し、新出文型の定着を図った。理解の段階を踏んだドリル練習をした後、Step 3として自己表現課題に取り組みさせた。書くためのツールと内容を明確に示し、段階的な指導を行うことで、まとまりのある英文を書くことをねらいとした。主に、家庭学習としての課題であり、英語を苦手とする生徒にとってはハードルの高い取り組みであった。そのため、時には例文を示し、英文の一部をアレンジする形で書くことを指導したこともあった。課題はノートに書かせ、その都度添削して返した。その際、書かれた内容に関する感想等を付け加え、コメントによる意欲づけを行った。また、定期テストで出題する等、「書くこと」への意欲を喚起した。

(2) ALTによるSmall Talk

本校では、週に2回ALTが訪問する。この機会に、ALTにSmall Talkを行ってもらった。まとまりのある英語を集中して聞く練習を行い、聞く力を育成することをねらいとした。これまでに学習した表現やその日に学習する内容を盛り込みながら、Talkの話題をALTに考えてもらった。時には、その日の学習内容とは直接関係しないこともあったが、ALT自身の体験談や別紙資料②(C-2)のようなALTの自国に伝わる迷信等、生徒にとっては興味深い内容のものが多かった。基本的に月に2度の割合でALTにSmall Talkをしてもらった。聞いた後で、T/Fで内容理解の確認を行った。この取り組みに関するアンケートでは、70%以上の生徒が「役に立つと思う」と答えていた。

3 指導の実際

(1) 基本文プリントの活用

セクションごとの基本文プリントは、新出文型の確かな定着を図り、「書くこと」による自己表現力を育成することをねらいにして取り組んだ。1時間の授業の中では、「新出文型の口頭による導入」⇒「新出文型を含んだ活動」⇒「文法説明」⇒「基本文プリント」のような流れで授業を展開し、まとめの段階で活用することが多かった。Step 3の自己表現課題に取り組むときには、大いに辞書の活用を促した。生徒は辞書の例文の中から、必要な語彙や自分の気持ちに近い表現を見つけ出しながら課題に取り組んでいた。提出された英作文は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」と「表現の能力」の2観点において、それぞれA（十分満足）、B（おおむね満足）、C（努力が必要）の3段階で評価を行った。

(2) ALTによるSmall Talk

この取り組みは、主に授業の最初のWarm-upで実施した。回を重ねるごとに、生徒の聞き取ろうとする姿勢が目に見えて良くなってきた。

あんまり中身は分からないけど、英語の音に慣れるから役に立つと思う。

ALTの〇〇先生の英語はつながっていて聞き取るのは難しいけど、絵を見せてくれるのでそれを参考にして聞き取ることができた。

けっこう長い話だから聞く訓練になる。

分からなくても聞き取ろうとするから、けっこう勉強になる。

C-1 指導案

C-2 ワークシート①②

4 成果と課題

(1) 成果

基礎学力調査の結果から見えてきた生徒の弱点を克服するために、2つのねらいをもって指導の重点化に努めてきた。基本文プリントの取り組み方を見ていると、配付されると同時にすばやく取り掛かり、英語を苦手とする生徒もStep 1と2は自力で頑張る姿が見られた。授業のリズムを作る上でも効果的に活用できたと思う。また、定期テストでの自己表現力を見るための課題英作文への意欲も感じられた。文のつながりが不自然なものや語順に誤りがあるものなどがあるが、無答率は確実に減ってきた。英文を「書こう」という関心・意欲の高まりを感じることができた。

ALTのSmall Talkは、生徒の聞く姿勢に変容が見られた。知っている単語を聞き取ることができたときに見せる一瞬の表情やうなずきなど、集中して話を聞いているのがよく分かった。話の内容は生徒の視野を広げ、他国の異文化理解に役立ったと思われる。

(2) 今後の研究の方向性

私たちは今目の前にいる生徒に「どんな力をつけさせたいか」という明確な目標を持っていないといけない。1年生での理想とするゴールはどこなのか、卒業するときにはどんな力をもって卒業させたいのかという学年ごとの理想とするゴールを明確にもちながら、コミュニケーション能力の基礎となる「聞くこと」「話すこと」、その活動を支える「読むこと」「書くこと」の4領域の力をバランスよく総合的に伸ばすことを考える必要がある。そのために、今一度、本校の観点ごとの評価規準と実際の指導がつながっているかを見直し、つけたい力の系統性を明確に持ちながら3年間を見通した指導ができるように検討していきたい。